

平成 30 年 9 月 3 日現在

機関番号：43804

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780373

研究課題名(和文)小学生の問題行動とそれを抑制する教師の関わりに関連

研究課題名(英文)Instructional Style as a Factor Preventing Problem Behavior and Encouraging Pro-School Behavior in childhood

研究代表者

金子 泰之(Yasuyuki, Kaneko)

常葉大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：00710641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、児童期の問題行動と向学校的行動を明らかにし、問題行動を抑止し、向学校的行動を促進する教師の関わりを3年間にわたる縦断調査によって検討することであった。本研究から、5因子から構成される問題行動尺度を構成した。また、3因子から構成される向学校的行動尺度を構成した。問題行動を抑止し、向学校的行動を促進する教師の関わりは、年次によって異なっていた。小4では学習面の関わり、小5では事後的関わり、小6では事後的関わりと学習面の関わりが問題行動を抑止した。また、小4では能動的関わり、事後的関わり、学習面の関わり、小5では学習面の関わり、小6では能動的関わりが向学校的行動を促進した。

研究成果の概要(英文)：This purposes of the present study were to develop a problem behavior scale and pro-school behavior scale. This study examine the scale's reliability and validity. This study was planned as a longitudinal study. This study was longitudinal study over 3 years from elementary school fourth grader to elementary school sixth grader. This study constituted a problem behavior scale and pro-school behavior scale in childhood. And then, this study clarified the relationship between student guidance and school adaptation at elementary school.

研究分野：教育心理学, 発達心理学

キーワード：学校適応 生徒指導 問題行動 向学校的行動 教師の関わり 縦断調査 児童期

1. 研究開始当初の背景

筆者は、中学生の問題行動を抑制するメカニズムを2つの生徒指導(能動的関わりと事後的関わり)と2つの行動指標(問題行動と向学校的行動)から検討してきた。その結果、(1)教師による生徒への能動的な関わりが学校適応を促進する効果があること、(2)生徒指導によって問題行動を直接減らそうとするのではなく、向学校的行動を促進することを通して間接的に問題行動を抑制させる間接的問題行動抑制モデルが効果的であることを明らかにした。中学校の学校生活は、小学校の学校生活が土台となっている。児童期を対象とした学校適応研究も積み重ねていく必要がある。

そこで、申請者が中学生を対象にして明らかにした間接的問題行動抑制モデルを、小学生を対象にした調査によって検討することで、児童期から思春期にかけての学校適応を明らかにすることができる。

2. 研究の目的

本研究は、申請者が中学生によって明らかにした間接的問題行動抑制モデルを、小学生を対象にしたモデルによって検討し、児童期にも一般化することが可能かどうかを検討する。そして、児童の問題行動のメカニズムや児童の問題行動を抑制するメカニズムを明らかにすることが目的である。

この調査は、3つの研究から構成されている。まず研究1では、児童期の向学校的行動尺度、問題行動尺度に関する項目を収集するため、教員3名に面接調査を実施した。

次に研究2では、児童期の向学校的行動尺度、問題行動尺度を構成した。

最後の研究3では、小学校4年生から小学校6年生までの3年間において、向学校的行動の得点と問題行動の得点がどのように関連しているのかを明らかにした。さらに、問題行動を抑制し、向学校的行動を促進するための生徒指導を年次ごとに検討した。

3. 研究の方法

(研究1)

調査協力者と時期 首都圏にある公立小学校で管理職経験のある教員1名、東海地方にある公立小学校で管理職経験のある教員2名、合計3名に面接調査に協力してもらった。また、公立小学校と公立中学校で勤務経験のある教員1名には、面接調査から得られたプロトコルを分類する作業に協力してもらった。2015年5月、6月、8月に面接を行った。

調査内容 面接では、半構造化面接を用いた。2つのことを中心にして半構造化面接を行った。1つ目は、小学校において、教員の目からみて問題だと判断する児童の行動であった。2つ目は、小学校において児童が学校生活を頑張っていると教員が感じるときの行動であった。

(研究2)

調査協力者と時期 公立小学校9校で調査

を実施した。4年生367名(男子172名、女子195名)、5年生411名(男子215名、女子196名)、6年生324名(男子158名、女子166名)であった。2016年3月に調査を実施した。

分析内容 研究1で明らかになった学校内問題行動に関する項目24項目、向学校的行動に関する項目22項目であった。あなたはここ1年間で以下のことをどれくらいしたことがありますか?という教示のもと、ぜんぜんない(0点)から何度もある(3点)までの4件法で回答を求めた。

(研究3)

調査協力者と時期 公立小学校5校の児童であった。3回にわたる縦断調査に回答のあった児童184名(男子80名、女子104名)を分析対象とした。この184名は、第1回目の調査時に4年生であり、4年生(2016年3月に調査実施)、5年生(2017年3月に調査実施)、6年生(2018年3月に調査実施)の3回にわたる縦断調査に回答があった。

分析内容 研究2で明らかになった学校内問題行動尺度、向学校的行動尺度に加え、教師の関わり尺度(能動的関わり、事後的関わり、学習面の関わり)について分析を行った。

4. 研究成果

(研究1)

管理職経験のある教員3名に対して実施した面接から得られたプロトコルの中から、児童の問題行動に関するエピソードを抽出した結果、36個のエピソードが得られた。児童の向学校的行動についても同様に、エピソードを抽出した結果、22個のエピソードが得られた。小学校と中学校の両方での勤務経験がある教員1名が、問題行動に関する36のエピソード、向学校的行動に関するエピソード22個を、分類した。その結果、問題行動の下位カテゴリーとして、非行、いじめ、対教師的行動、衝動性、こだわり、集団行動の苦手さ、役割放棄、不注意の8つのカテゴリーが得られた(表1)。

表1 小学生の問題行動についての分類

カテゴリー	下位カテゴリー	具体的なエピソード
問題行動	非行	火遊びをする お店で売っている物をお金を払わずとって帰る たばこを吸う お酒を飲む 友達が持っている物で欲しくなったら黙ってとる
	いじめ	友達を仲間外れにする 友達の悪口を言う 友達をからかう 友達をたたいたり、蹴ったりする 友達の物を隠す 友達が持っている物に落書きをする
	対教師的行動	先生から言われたことに反抗する 先生の指示に従わない 先生の言うことを聞かない 先生に悪口を言う 授業と関係のないことを言って先生の邪魔をする
	衝動性	友達を傷つけることを言ってしまう 話を聞かなければいけないときに、自分が話したいことを言ってしまふ イライラして友達をたたいてしまう 授業中におしゃべりしてしまう 授業中に大声を出してしまう
	こだわり	学校の物を壊してしまう 自分が好きでなくても「課題をやらない 自分が苦手なことはやらない つまらないことはやらない 自分の思い通りにならないとイライラしてしまう
	集団行動の苦手さ	集会や体育など整列しなくてはならないときに列にならばない みんなと同じ行動ができない イスに座ってられない 順番を守らない 授業中に教室を出してしまう
	役割放棄	当番や直責をさぼる 掃除をさぼる 委員会をさぼる
	不注意	授業中、先生の話を聞いていない 授業とは関係のないことを考えている 忘れ物をする

向学校的行動の下位カテゴリーとして、学校生活、集団生活における他者との関わり、学習面の3つのカテゴリーが得られた(表2)

表2 小学生の向学校的行動についての分類

カテゴリー	下位カテゴリー	具体的なエピソード
向学校的行動	学校生活面	掃除をする 給食を残さず食べる 寄り道しないで帰る 苦手なことにも挑戦する 自分で進んで係、日直、委員会の仕事に取り組む 先生に頼まれた仕事に取り組む みんなで協力して行事(運動会、学芸会、音楽会)に参加する 一生懸命行事(運動会、学芸会、音楽会)に参加する
	集団生活における他者との関わり	困っている友達を助ける 自分より年下の学年の子どもの面倒を見る クラスの手を協力して行事に取り組む すずんで挨拶をする 友達や先生が話していることを、よく聴く
	学習面	前日に、学校に持って行く持ち物を準備する 毎日、予定帳に必要なことを記入する 提出物の期限を守る 時間を見て生活する 帰ったら、予定帳を見て次の日の準備をする 授業に集中し取り組む 授業が始まる前にノートや教科書を準備する 分からない問題を頑張って解く 授業中に発言する

(研究2)

研究1の面接調査で得られた結果(表1, 表2)をもとに、問題行動尺度と向学校的行動尺度の構成を行う。表1と表2から得られた項目を用いて、アンケート調査を実施した。

学校内問題行動に関する24項目に対して、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果, “友達の悪口を言う”などの項目から構成されている対友人的問題行動, “授業中, イスに座ってられない”などの項目から構成されている対学校の問題行動, “先生の指示にしたがわない”といった項目から構成されている対教師の問題行動, “授業中, 授業とは関係のないことを考えている”などの項目から構成されている授業関連の問題行動, “自分が苦手なことはやらない”などの項目から構成されているこだわり問題行動, 以上の5因子が抽出された(表3)。

表3 学校内問題行動の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
対友人的問題行動(α=81)					
友達の悪口を言う	0.796	-0.039	-0.038	0.056	-0.061
友達をからかう	0.728	-0.026	-0.068	-0.003	0.033
友達をきずつけることを言ってしまう	0.724	0.031	0.05	-0.063	0.054
友達を仲間はずれにする	0.589	0.052	0.011	0.054	-0.076
イライラして友達をたいてしまう	0.431	0.122	0.035	-0.123	0.16
対学校の問題行動(α=70)					
授業中, イスに座ってられない	-0.046	0.694	-0.059	-0.084	-0.016
宿題を守らない	0.026	0.592	0.021	-0.084	-0.029
当番や日直をさぼる	-0.027	0.543	-0.024	0.2	-0.035
集会や体育などを整理しなくてはならないときに列にならばない	-0.024	0.46	0.057	0.015	0.076
順番を守らない	0.112	0.453	-0.088	0.052	0.061
学校の物をこわしてやる	0.177	0.388	0.066	0.044	-0.109
対教師の問題行動(α=85)					
先生の指示にしたがわない	-0.009	-0.018	0.949	-0.065	0.019
先生の言うことを聞かない	-0.056	0.035	0.891	0.042	-0.048
先生から言われたことに, 反こする	0.19	-0.081	0.599	0.027	0.022
授業関連の問題行動(α=72)					
授業中, 授業とは関係のないことを考えている	0.045	-0.091	-0.075	0.826	0.068
授業中, 先生の話を聞いていない	-0.089	0.079	0.139	0.678	-0.046
授業中, おしゃべりしてしまう	0.296	-0.044	0.034	0.403	0.006
机をよす物をやる	0.009	0.043	-0.045	0.396	0.025
こだわり問題行動(α=76)					
自分が苦手なことにはやらない	-0.019	-0.01	-0.008	-0.009	0.812
自分が好きなことには集中する	0.082	-0.066	-0.05	0.053	0.704
自分がやめたくない課題をやらない	-0.097	0.177	0.156	0.081	0.484
因子間相関					
	0.396	0.509	0.598	0.529	
		0.556	0.452	0.553	
			0.585	0.599	
				0.615	

次に, 向学校的行動に関する22項目に対して, 因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果, “授業中に発言する”などの項目から構成されている学校生活関与行動, “帰ったら, 連絡帳を見て次の日の学校に必要なものを準備する”などの項目から構成されている計画的学校生活行動, “みんなで協力して行事(運動会, 学芸会, 音楽

会)に参加する”などの項目から構成されている学校行事への関与行動, 以上の3因子が抽出された(表4)。

表4 向学校的行動の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
学校生活関与行動(α=82)			
授業中に発言する	0.709	-0.168	-0.094
わからない問題をかんぽってといてみる	0.679	0.077	-0.088
苦手なことにも, ちよせんする	0.592	0.009	0.033
授業に集中して取り組む	0.506	0.246	-0.009
自分から進んで係, 日直, 委員会の仕事に取り組む	0.486	-0.031	0.231
先生にたのまれた仕事に取り組む	0.479	-0.049	0.329
すずんであいさつをする	0.446	-0.014	0.156
時間をみて生活する	0.415	0.326	-0.063
計画的学校生活行動(α=78)			
帰ったら, 連絡帳を見て次の日の学校に必要なものを準備する	-0.122	0.864	-0.006
前日に, 学校に持って行く持ち物を準備する	-0.134	0.79	0.019
毎日, 連絡帳に必要なことを記入する	0.03	0.597	0.044
提出物の期限を守る	0.196	0.499	-0.027
学校行事への関与行動(α=82)			
みんなで協力して行事(運動会, 学芸会, 音楽会)に参加する	-0.057	-0.037	0.900
一生懸命, 行事(運動会, 学芸会, 音楽会)に参加する	-0.088	0.026	0.889
クラスの子と協力して行事に取り組む	0.221	0.108	0.487
因子間相関			
		0.627	0.661
			0.46

(研究3)

研究2で構成した尺度を用いて, 4年次, 5年次, 6年次と進級するにつれて, 問題行動と向学校的行動がどのような関係になっているのかを明らかにする。また, 問題行動を抑制し, 向学校的行動を促進する教師の関わりを年次ごとに明らかにする。

表3と表4の結果から, 学校内問題行動尺度, 向学校的行動尺度, とともに因子間相関が高いため, 各尺度について因子を合算し得点を算出した。問題行動尺度は, 5つの因子を合算し, 得られた得点を問題行動得点とした。向学校的行動尺度は, 3つの因子を合算し, 得られた得点を向学校的行動得点とした。これによって, 全体の傾向を示すこととした。小4, 小5, 小6と進級するにつれて, 各年次の問題行動と向学校的行動にどのような関連があるのかを調べるため, 重回帰分析を行った。統計的に有意だったパスのみを図1に示した。



図1 3年間の縦断調査からみる問題行動と向学校的行動の関連

小4の問題行動は小5の問題行動と正の関連があり, 小5の問題行動は小6の問題行動と正の関連があった。また, 小4の向学校的行動は小5の向学校的行動と正の関連があり, 小5の向学校的行動は小6の向学校的行動と正の関連があった。向学校的行動と問題行動の影響関係は見られなかった。

次に, 問題行動を抑制し(表5), 向学校的行動を促進する(表6)教師の関わりを, 年次ごとに分析した。問題行動については(表5), 小4では学習面の関わりが問題行動に負の影響を与えていた。小5では事後的

関わりが問題行動に負の影響を与えていた。小6では事後的関わりと学習面の関わりが問題行動に負の影響を与えていた。

表5 教師の関わりと問題行動の関連

	問題行動		
	小4	小5	小6
教師の関わり			
能動的関わり	-.089	-.064	.087
事後的関わり	-.046	-.200*	-.274*
学習面の関わり	-.184**	.007	-.199+
重決定係数 (R <sup>2</sup> )	.083**	.057**	.136**
	** p<.01	* p<.05	+ p<.1

向学校的行動については(表6),小4では,能動的関わり,事後的関わり,学習面の関わりの3つが向学校的行動に正の影響を与えていた。小5では,学習面の関わりが向学校的行動に正の影響を与えていた。小6では,能動的関わりが向学校的行動に正の影響を与えていた。

表6 教師の関わりと向学校的行動の関連

	向学校的行動		
	小4	小5	小6
教師の関わり			
能動的関わり	.139**	.088	.336**
事後的関わり	.092*	.037	-.091
学習面の関わり	.186**	.149+	.033
重決定係数 (R <sup>2</sup> )	.136**	.063**	.090**
	** p<.01	* p<.05	+ p<.1

児童期の問題行動を抑止し,向学校的行動を促進するためには,子どもの発達に合わせた教師の関わり方が必要であることが明らかとなった。

今回の調査結果は,小学校4年生から小学校6年生までの3年間の縦断調査によって明らかにされたものである。中1ギャップや小中一貫教育においては,児童期から思春期にかけての移行期から,学校適応を捉える必要性が指摘されている。今後は,児童期から思春期にかけての移行期を捉える縦断調査を行い,研究を積み上げる必要があるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

金子泰之 2015 小学校における児童の問題行動と向学校的行動の抽出 常葉大学短期大学部紀要, 46, 171-178.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

金子泰之 (KANEKO Yasuyuki)

静岡大学教職センター 講師

研究者番号: 00710641